

九成宮醴泉銘

動画「九成宮醴泉銘の用筆」「清泉」
別冊硬筆ワークシート P 5・6

別冊毛筆ワークシート P 6～10

教材研究

作品について

概要

唐の第二代皇帝・太宗は、貞観六（六三二）年、避暑のために九成宮を訪れた。九成宮は、隋の文帝が造営した仁寿宮を改修した離宮で、唐の都・長安の西北百五十キロメートルの山中にあった。この地は真夏でも涼しく、避暑には最適であったが、高地であることから水源に乏しかった。ところが、この年の四月、太宗が長孫皇后とともに城内を散歩していたところ、西側の高閣の下にわずかに潤いのあるところを見つけ、杖でつくと醴（あまぎけ）のような泉が湧き出てきたという。この瑞兆（めでたいことの起きる前兆）を記念し、勅を奉じて、侍中（側近）の魏徵（五八〇～六四三）が撰文し、弘文館学士の欧陽詢（五五七～六四二）が「楷書の極則」ともいわれる究極の楷書で書き上げたのが、「九成宮醴泉銘」である。

書かれている内容

九成宮の環境のすばらしさを説き、太宗の功績をたたえている。常に万民を思いやり、わが身の労をいとわない聖天子であるがゆえに、この瑞兆がもたらされたという。そして太宗が、「高いところにあつては墜ちることを思い、満ち足りていれば溢れないよう戒める」ようにすれば、今後もうまくいくという。撰者の魏徵は、太宗を臆せず戒めたことで有名であるが、この銘文も勸戒の言葉で結ばれている。

原石・拓本について

原碑は現在も九成宮遺址に建っているが、古くから究極の楷書を学ぼうと繰り返し採拓が行われてきた。その結果、文字は摩滅し、補刻

が施されたため、旧拓でなければその真髄を学ぶことは難しい。以下の二品は、旧拓の中でも代表的なものである。

- 端方旧藏海内第一本……三井記念美術館蔵の拓本。「海内第一本」と称される名品で、南宋拓とされる。清の端方など名家の手を経て、昭和十一（一九三六）年、三井高堅の聴水閣の所蔵となった。
- 李祺旧藏本……もとは明の李祺が所蔵し、現在は故宮博物院（北京）が所蔵する拓本。現存最古の宋拓とされ、三井本に比べると字画が肥潤である。石碑には字がV字型に刻されるため、風蝕や採拓により石面の字は次第に細くなっていく。三井本よりも古い故宮本の字画は当然肥潤であり、より原状に近い拓といえるだろう。

筆者について

概要

欧陽詢は、字を信本といい、湖南省臨湘の出身である。父の紇は陳の広州刺史であったが、謀反の疑いで死刑となり、詢は父の友人である江総に養われた。人並み外れて聡明で、書物を数行同時に読むことができ、経書・史書に通じていた。隋・唐に仕え、太宗が即位すると、太子率更令（皇太子の養育係）・弘文館学士となり、渤海男の爵位を与えられた。裴矩と共に「芸文類聚」を編纂している。

書法に優れ、『新唐書』欧陽詢伝によると、初め王羲之を学んだが、年を重ねるにつれ、そこに独自の險勁さが加わっていったという。いっぽう同書には、魏の索靖が書いた碑を見に行き、三日も泊り込んで鑑賞していたというエピソードも紹介されている。清の阮元は『南北書

派論』において後の逸話を重視し、欧陽詢は艶麗な王羲之ではなく、魏の索靖のような謹嚴な碑刻系の伝統を受け継いだのだと述べている。この説は否定されることも多いが、それほど「九成宮醴泉銘」をはじめとした欧陽詢の書には、險勁さ・瘦怯さを感じられるのである。

しかし、その書風に反して欧陽詢の外見は貧弱で、容貌も醜かったといわれる。唐の胡璩『譚賓録』には、長孫皇后の葬儀の際、喪服姿の欧陽詢を見た官吏の許敬宗が失笑し、左遷されたという話もある。ただ、気性は激しかったようで、唐の劉肅『大唐新語』などには、皇后の兄で筆頭宰相であった長孫無忌に猿とからかわれ、「お前など弁髪をして馬に乗り袴をはいている胡族ではないか」と言い、太宗にたしなめられたという話もあり、敵も多かったのではないかと思われる。実は白猿の子であったという有名な小説（『補江総白猿伝』）が書かれたのも、それゆえであろう。

「九成宮醴泉銘」の究極の楷書には、欧陽詢の強さや気性の激しさ、父を亡くしながらも激動の時代を生き抜いたしなやかさ、そしてコンプレックスをばねにした美へのこだわりが背景にあると考えると、理解しやすいのではないだろうか。

欧陽詢の他の作品

楷書の作品には「化度寺碑」、「温彦博碑」、「皇甫誕碑」などがある。また、隸書の作品には「房彦謙碑」などがある。そのほか、行・草書や細楷の模本や刻本がいくつか伝わっている。

指導のポイント

指導上の留意点・書風について

- 前出の「孔子廟堂碑」と比較し、その書風の違いがどこから生まれるのか、字形や用筆に着目して考えることができるよう導きたい。
- 虞世南の「外柔内剛（外面は柔軟で内面は剛毅）」に対し、「外剛内

柔（外面は剛毅で内面は柔軟）」と評され、その引き締まったりりしい書風が高く評価されている。

用筆・点画の特徴・字形について

①直線的で鋭い点画

- 全般に、鋭角的に起筆し、切れ味がある引き締まった線質を心がけて筆を抜きたい。

- 起筆は露鋒中心だが、一部に藏鋒的な筆使いが見られる。

- 送筆は、長短線ともに直線的である。長い横画などに、送筆途中で筆圧を変化させている例があることに注意したい。

- 収筆は、一度押さえた後、軽く筆を起こして打ち直し、起筆の方向へ戻して形作るものが多い。穂先の動作に十分注意したい。

- 縦画のはねは、直角に押し出すようにはね出している。

②緻密に構成された点画

- 絶妙な間架結構法（点画の間隔の取り方と字形の整え方）で書かれており、均整の取れた造形から「楷書の極則」とよばれる。

- 点画の一部を接合させずに離している字が多く見られ、「不即不離」の關係で一字を構成していることに気づかせたい。

- 横画の右上がり強い。特に、偏と旁から成る文字は左右の角度が異なり、変化をもたせながらバランスを取っている。

- 縦画を上部に突き出すことで、空間にゆとりをもたせていることに気づかせたい。

③縦長で背勢

- 字形は基本的に縦長であり、相対する二本の縦画を背勢に引き締めている例が多く見られる。引き締まった字形にもさまざまな工夫があり、一律に背勢の原理だけで字形が統一されているものでもない。

